

平安文学におけるかな書道

—『源氏物語』にみられる書道観と時代性—

南條 佳代

〔抄録〕

『源氏物語』において、書道に関する多くの記述がなされている。とりわけ梅枝の巻で、この時代のかな書道批評が、光源氏の言葉を通して語られている。これは、書道に造詣が深い紫式部ならではの書道観として、この時代の書風や様子を著しているのである。では、フィクションである『源氏物語』でのかな書道の扱われ方は、実際にこの物語が書かれた平安時代のかな書道と、どういった違いがあるのだろうか。書道史と比較しながら、検証していきたい。「よろづのこと、昔には劣りざまに、浅くなりゆく世の末なれど、

仮名のみなむ、今の世はいと際なくなりたる。」(梅枝)

これは、光源氏の言葉を通しての紫式部の書道観であるが、実際のかな書道は、まだこの時には絶頂期とはいえないのである。本稿は、この時代の書道の捉え方、またかなの扱われ方、書道史上における『源氏物語』の位置を考察し、明確にしていくものである。

キーワード 源氏物語、書道、かな

一 はじめに

『源氏物語』をはじめとする平安文学には、書道についての多くの記述がある。これは、特に書道に造詣が深かった紫式部の書道観であり、この時代の書風や様子として捉えることが出来るのである。

それでは、作り物語である『源氏物語』でのかな書道の扱われ方は、

実際にこの物語が書かれた平安時代のかな書道と、どういった違いがあるのだろうか。本稿は、『源氏物語』の中で語られている「かな」とは、どのような文字なのかを書道史を踏まえながら明らかにしていくものである。

二 かなの成立

日本では、中国から流入した漢字をくずして平仮名、また漢字を簡略化して仮名を作りだした。仮名は、もとは、「かな」といい、「かりな」が転じたもの。「な」は文字の意味。漢字を正式な文字「まな」（真名）としたのに対し、漢字を仮りて作った文字という意味。日本語の表記のために、漢字の音を利用して仮名とした。その仮名の種類には次のようなものがある。

万葉仮名（真仮名・変体仮名）

日本語表記のために一字一音で表記したものをいう。しかし、種類も多く同一音に対して、幾通りもの使用字があったのである。その行書・草書交じりの漢字を羅列した奈良時代（七六〇年代）の『万葉仮名文書』が平仮名の原型といわれる。奈良時代に発生し、平安期までおよそ百年ほどの間、社会的に広く用いられた。

草仮名

万葉仮名を略体化した草書体のもの。

平仮名（女手）

草仮名をさらに簡略化し、漢字とは思えないほど変化した。現代のひらがなより字母は多い。

片仮名

万葉仮名の偏や旁の一部をとったもので、漢文訓読の補助機能を持つ。平仮名と同時期に発達する。

葦手

水辺に葦の茂りや、文字の形をした石など隠し字を書き加えて、和歌を詠みこんだもので、一種の文字遊び¹⁾。

これらのように、漢字を簡略化して仮名が成立し、かなの過渡期として、それぞれに分けられているのである。

三 かなの発展

平安時代中期、九世紀後半から十世紀前半になると、和歌をはじめ宮廷文化が発達し、それに伴いかなも美しさを発揮した。平仮名が書簡文や覚書に用いられ、主に女性が記したり、女性に宛てたのが、女手といわれるゆえんでもある。また、勅撰の『古今和歌集』が平仮名で認められた歌集であり、『伊勢物語』『竹取物語』『土佐日記』など平仮名で書かれた文学が多く著された。これは、平仮名が実用的な文書の記録として発達すると共に、文芸作品に使用されるようになり、美的鑑賞の対象ともなったことを意味する。

さらに、貴族階級における子女の教育の中で、流麗な書風の平仮名が賞美され、贅を尽くした色紙や料紙に記された和歌や、絵巻物が賞翫されるようになったのである。十一世紀から十二世紀の終わりに書かれた『高野切』『西本願寺三十六人集』『元永本古今集』『源氏物語絵巻』などが、仮名の絢爛たる精華の遺品である。

四 かなの流れ

漢字を簡略化した万葉仮名、草仮名の男性的なかなから、さらに簡略

化した女手といわれるやわらかな平仮名ができ、偏や旁の一部をあらわした片仮名もできた。これらは、日本語を表記する上で、今までの漢字だけでは難しく、より私的な書簡・日記・物語といったものに多く使用されるようになった。その時期も平安時代という、最も煌びやかな藤原文化の中で、和歌・文学、それを記す書道までもが、女子の教養として学ばれていったのである。それに伴い、手習の正本として、いわゆる古筆作品やその料紙までもが、豪華絢爛な美的鑑賞の遺品となって今日に伝わっているのである。

かな文字としては、漢字の楷書から草書体、字母の多い変体仮名、さらに平仮名へと確立していくのである。その書風は、連綿の少ない漢字らしい男性的な力強さから、連綿の多い端正な形で、線の強さを感じさせるもの、さらには、字形の変化を求めた流動的な散らし書きへと移行していくのである。そして、これらの平安期の書風を受けながらも独自の個性を生かしたものに、鎌倉時代とともに変化していくのである。

このように、かなは文字として、漢字を簡略化して成立した。はじめは、日本語の一字一音の表記のためであるが、その利便性と速く書くためにも重宝し、広まっていったのである。

さらには、平安時代になると女性が記した書簡文にも用いられ、かなは女手と呼ばれ、和歌や物語、日記などにも平仮名が用いられるようになる。その様子が、『源氏物語』をはじめさまざまな作品にも書かれており、史実としてのかなの発展をうかがうことができる。

五 源氏物語に見られる書道観

これらのかなの流れを踏まえながら、『源氏物語』にみられる書道観と思われる記述について見ていきたい。

①「よろづの事、昔には劣りざまに、浅くなりゆく世の末なれど、仮名のみなん今の世はいと際なくなりたる。古き跡は、定まれるやうにはあれど、ひろき心ゆたかならず、一筋に通ひてなんありける。妙にをかしきことは、外よりてこそ書き出づる人々ありけれど、」
(梅枝) (『新編日本古典文学全集』²⁾に拠る。以下同じ。)

何事もすべて、昔に比べると劣りざまで、浅薄になっていく末世だけれど、仮名の書だけは当今じつに際限もなく見事なものになってきたものです。昔の人の筆跡は、きまった書法にかなってはいないようだけれど、ゆったりとした気持ちで十分に出ていないで、どれも一つの型にはまっているものです。みごとで風情があるという点は、後の時代になつてはじめて書きあらわす人々が出てきたものですけれど、

②手を書きたるにも、深きことはなくて、ここかしの、点長に走り書き、そこはかとなく気色ばめるは、見るにかどかどしく気色だちたれど、なほまことの筋をこまやかに書き得たるは、うはべの筆消えて見ゆれど、いまひとたびとり並べて見れば、なほ実になんよりありける。(帚木)

文字を書く場合にも、深い素養はなくて、あちらこちらの点を長く引いて走り書きをし、なんとなく気取っているのは、ちょっと見

ますと才気ばしって気がきいていますが、やはりほんとうの筆法を丹念に書き込み得ているものは、表面的な筆勢はないようにみえますけれど、もう一度取り上げて両方を並べてみると、やっぱり実質のあるほうに良さを認めます。

このように、『源氏物語』の中では、昔の人の筆跡はきまった書法で一つの型にはまっている。ほんとうの筆法は、実質のあるほうだと述べているのである。これについて駒井鶯静氏は、

紫式部の美意識には、視覚的な輪郭よりも、情感を喚起するような、触覚的な美質の印象を好むところがある。

見た眼には巧い技術的効果のあるものより、高い次元の内的味わいのある書に魅力を把握し、書の才能とは別の感覚を備えた筆致に、感動のことはばを放つ。目の高さの確かさばかりではなく、心の高さを思わせる。^③

と述べている。筆法の技術だけでなく、心の高さ、崇高さも内包されるような筆跡がよいとしている。

また、小松茂人氏は、

自由にのびのびした、柔らかな、こまやかな情感を伴う、仮名の美を認めようとするところに、「梅枝」の巻の書道論の批評意識の根本的なものが見られるのである。(中略) しかもその精神美・風格美を、「うはべの筆消えて見ゆる」静淑・温雅の「なまめかし」の美にもとめているところに格別な意味を思うのである。^②

と述べている。かなの美は、まさに柔らかな、こまやかな情感を伴うものなのである。^④

さらに、上野辰義氏は、

男性にとつて、人品の程をしるばせる優れた女性の筆跡は、その主への思いをつのらせるものであった。^⑤

と述べている。筆跡は、その書者(女性)の品格までも表わし、それが、読み手(男性)の想像力をかきたてるものだとされている。

これらのように、『源氏物語』においては、「定まれるやうにはあれど、ひろき心ゆたかならず、一筋に通ひてなんありける。」という硬い書風が主だったものが、「妙にをかききことは、外よりてこそ書き出づる人々ありけれど、」のように、柔らかな書風で表わす人々がでてきたとしている。それは、「なほまことの筋をこまやかに書き得たるは、うはべの筆消えて見ゆれど、いまひとたびとり並べて見れば、なほ実になんよりありける。」という表面上の技術美だけでなく、書者の品格、心の崇高さまでもが内包されるような筆跡がよいとしているのである。

六 源氏物語成立期におけるかな書道の時代性

『源氏物語』の執筆時期は、明確にはされていないが、『紫式部日記』などから推察すると、おそらく寛弘三年(寛弘八年(一〇〇六)一〇一一)頃といわれている。まずは、『源氏物語』の中で書風について述べている箇所を取り上げたい。

①いときよげに、消息文にも仮名といふもの書きませず、むべむべしく言ひまはしはべるに、(帚木)

じつにきれいな筆跡で、手紙にも、かなというものを使わずに、もっともらしい言いまわしをいたしますので、

②紫の紙の、年経にければ灰おくれ古めいたるに、手はさすがに文字強う中さだの筋にて、上下ひとしくかいたまへり。(末摘花)

紫の紙の、年が経って灰が残って古ぼけたのに、筆跡は、さすがにしっかりした筆つきで、中昔の書風で、行の上下をそろえてお書きになっている。

③御手こまやかにはあらねど、らうらうじう、草などをかしうなりにけり。(賢木)

お筆跡は繊細な美しさではないが、書きなれた巧みさで、草書体など達者なものになっていた。

④絵は巨勢相覧、手は紀貫之書けり。紙屋紙に唐の綺を陪して、赤紫の表紙、紫檀の軸、世の常のよそひなり。

白き色紙、青き表紙、黄なる玉の軸なり。絵は常則、手は道風なれば、今めかしうをかしげに、目も輝くまでみゆ。(絵合)

絵は巨勢の相覧、書は紀貫之が書いたものである。紙屋紙に唐の綺を裏打ちして、赤紫の表紙、紫檀の軸はありふれた装いなのである。白い色紙、青い表紙、黄色い玉の軸である。絵は常則、書は道風であるから、現代風に派手で、見た目にも美しく、目にもまばゆいまで見える。

⑤青摺の紙よくとりあへて、紛らはし書いたる濃墨、薄墨、草がちにうちませ乱れたるも、人のほどにつけてはをかしと覧ず。(乙女)

青摺りの紙を折にふさわしいようにうまく取りあわせて、筆跡を紛らわすようにして書いた墨の濃淡、それに草仮名を多くませて散らし書きにしてあるのも、その人の身のほどを思うと興そそられてこ

らんになる。

⑥手習どもの乱れうちとけたるも、筋変り、ゆゑある書きざまなり。ことごとく草がちなどにもざれ書かず、めやすく書きすまじたり。

(初音)

気をゆるしてとり散らしている手習の反古も、筆跡が普通とは変わっていて素養の深い書きぶりである。大仰に草仮名を多くしゃれて用いるなどというふうでもなく、好ましくしつとりと書いてある。

⑦青き色紙一重ねに、いと草がちに、怒れる手の、その筋とも見えず漂ひたる書きざま、下長に、わりなくゆゑばめり。行のほど、端さまに筋かひて、倒れぬべくみゆるを、(常夏)

青い色紙を二枚重ねたのに、まことに草仮名をたくさん使って、角ばった筆跡で、誰の書風ともつかず、ひよろひよろした書きぶりで、文字の下半が長くて、むやみに気どっている。行の具合は端のほう

が斜めになって倒れそうに見えるが、

⑧「葦手歌絵を、思ひ思ひに書け」(梅枝)

「葦手なり、歌絵なりを、それぞれ好きなようにお書きなさい」
⑨御心のゆくかぎり、草のもただのも、女手もいみじう書きつくしたまふ。(梅枝)

ご存分に、草仮名の字も、普通の字も、さらに女手の字も、これ以上はとでもというほどすばらしくお書きになられる。

⑩ただ三行ばかりに、文字少なに好ましくぞ書きたまへる。(梅枝)
一首をただ三行ほどに、漢字をあまり使わずに形よくお書きになっている。

⑪草にいとをかしよう書きたまへり。(稚本)
草体で、まことに美しくお書きになっていらつしやる。

これらのように、書風について多くの記述がある。①の「仮名というものかきませず」という手紙の中ではあるが、かな文字をつかつていないのである。また、②は、「中さだの筋にて、上下ひとしくかいたまへり」という中昔風で、上下をそろえて書いているのである。③は、「草などをかしようなり」と草書体など達者なものになっている。④は、「手は紀貫之書けり。世の常のよそひなり。手は道風なれば、いまめかしようをかしげに」と書は、紀貫之であるからありふれている。道風であるから現代風で派手で、見た目にも美しいとしている。⑤は、「草がちにうちまぜ乱れたる」という草仮名を多くまぜて散らし書きにしてあるのである。⑥は、「ことごとく草がちなどにもざれ書かず」という、大仰に草仮名を多くしゃれては書かないのである。⑦は、「いと草がちに」「下長に」「行のほど、端さまに筋かひて、倒れぬべくみゆるを」という、まことに草仮名を多く使って、文字の下半が長くて、行の具合は端の方が斜めになって倒れそうに見えるというのである。⑧は、「葦手」という今では見られなくなった書き方のことである。⑨は、「草のもただのも、女手も」とは、草仮名の字も、普通の字も、女手の字もというのである。⑩は、「三行ばかりに、文字少なに」という一首をただ三行ばかりに、漢字をあまり使わずにお書きになっているのである。⑪の「草に」は、草書体ということである。

さらに、『源氏物語』の中における書風の記述について見ていくと、手紙であつてもかなを使つていないこともあり、中昔風な上下をそろえ

て書いているものもある。また、草書体で草仮名を多く使つて、しゃれて散らし書きにしたり、文字の下半が長く、行の端を斜めにしたりしている。そういった書きぶりが、道風のように現代風で派手で、見た目も美しいとしている。それに反し、紀貫之が書いたものは、ありふれた装いとされている。しかしながら、この時代は、草仮名も普通の字(漢字)も女手も書かれていたのである。

では、「この時代」というのはいつ頃のことなのであろうか。『源氏物語』の時代設定は、準拠に拠ると実際の執筆年より一〇〇年前(九〇五頃)であり、さらに梅枝巻は、執筆年より五〇、六〇年前(九四五〜九五五)といわれている。その頃の書道史からみていくと、紫式部の生きていた源氏執筆年(一〇〇六〜一〇一一頃)は、まだかなの完成期まではないっていかない。書道史上から見ると、『源氏物語』の時代設定と同じように、かなの過渡期の「草がな」の時代だつたのではないだろうか。それは、本文からもわかるように、「仮名というもの書きませず」①や、③⑤⑥⑦⑨⑪のように「草がな」がよく使われ、⑩のように漢字をあまり使わず、しかし、⑨のように草がなだけでなく、普通の字(漢字)も女手(平がな)も、さらに⑧葦手や歌絵も書かれるような時代であつたのである。

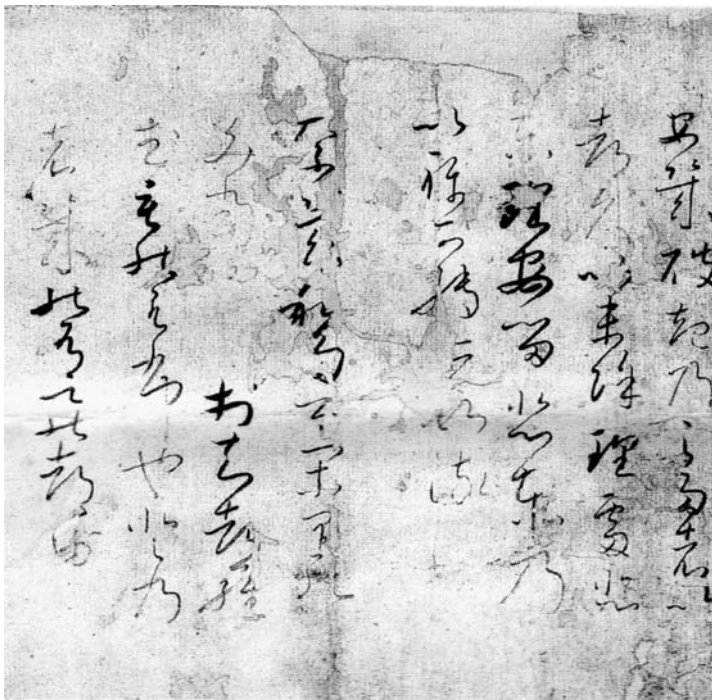
ここで、「この時代」の頃に書かれた、現存している古筆「秋萩帖」(あきはぎじょう)について、『古筆大辞典』では次のように書かれている。

巻頭「あきはぎの」の書き出しから、『秋萩帖』と呼ばれる。大部分が万葉仮名の草体で、歌一首を四行に書いている。文字は古体で、書風が古雅であり、字形は平正にして線は秀潤温雅で、運筆に

緩急抑揚の変化はない。二字、三字を続けて書いているが、各字はそれぞれ孤立していて、連綿体になっていない。筆者は、小野道風（八九四～九六六）とされるが、真跡とは認められない。

この作品は、藤原時代中期と考えられるが、書風が万葉仮名の草体で書かれており、古雅な趣である。『源氏物語』の記述で、「草がちに」というのは、この「秋萩帖」のような書風だったのではないだろうか。

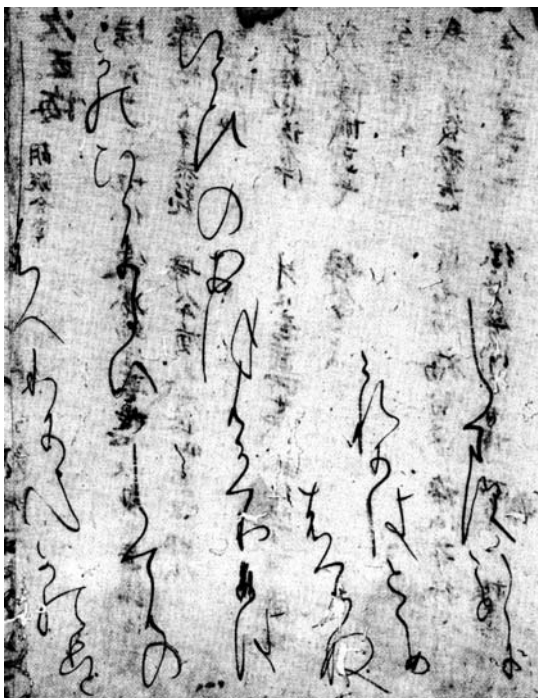
図1 秋萩帖⁷⁾



次に、「虚空菩薩念誦次第紙背仮名消息」（こくうぼさつねんじゅしだい）はいいかなしようそく（九六七）について、『古筆大辞典』では次のように書かれている。

石山寺所蔵の『虚空菩薩念誦次第』は、文書を継いで、その紙背に書写されている。文書はすべて石山寺の座主であった寛忠（九〇六～九七七）あてらしい。「康保三年三月一七日」（九六六）の日付があり、仮名消息もその頃と考えられる。字形は簡略にして豊円寛弘であり、自由に速く書かれている。線は秀潤にして繊細流麗、連綿は三字、四字を続けており自然で、巧妙。行は少しずつ低

図2 虚空菩薩念誦次第紙背仮名消息⁸⁾



く、短くなるとともに、少し左に傾斜しているが、散らし書きほど変化はしていない。墨色は、淡墨で明るく、おおらかな作。⁸⁾

康保三年は、小野道風が七十三歳で亡くなった年であり、この時代の書が洗練されていたことがわかる。しかしながら、書風は、「秋萩帖」のような連綿に曲線が多く、字形に硬さが見うけられる。

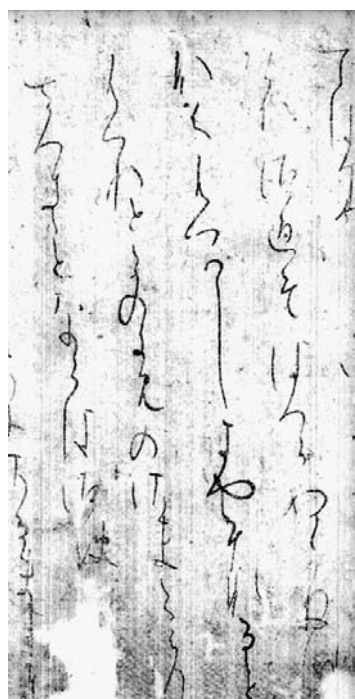
さらに、「北山抄紙背仮名消息」(ほくざんしょうしはいかなししょうそく)(九九七頃)については、『古筆大事典』では次のように書かれている。

藤原公任(九六六〜一〇四一)自筆の『北山抄』(卷十)の「吏途指南」の草稿本は二十五通、二十七張の文書の紙背を翻して書写している。それらの文書は別当宣案・解文・請文・注文・申文・消息などであり、消息には漢字の消息と仮名の消息とがある。また漢字に仮名を少しまぜて書いたものもある。仮名の消息には日付・差出所・あて所はない。しかし、長徳二年(九九六)から長保六年(一〇〇四)までに書いた消息と考えられる。字形の簡略な女手のうちでも最も簡略に書いているから、別の文字であるが、同じ文字のように見えるのが少なくない。淡墨の散らし書きで、行の高さと長さはそれぞれ違うが、行間の幅は同じようである。連綿は自然にして巧妙であり、長い。温雅にして優美であり、石山寺蔵の『虚空菩薩念誦次第』紙背の康保三年(九六六)頃の仮名消息よりも清新で、さらにいっそう洗練されている。⁹⁾

この作品は、『源氏物語』が書かれた頃の直前の作品である。『源氏物語』の記述にある「濃墨、薄墨、草がちにうちませ乱れたる」や「下長に、行のほど、端さまに筋かひて、倒れぬべくみゆるを」は、淡墨の散らし

書きで、行の高さと長さはそれぞれ違うが、行間の幅は同じようである。この「北山抄紙背仮名消息」のような書風を表わすのではないだろうか。

図3 北山抄紙背仮名消息¹⁾



つぎに、『源氏物語』におけるかな文字について、藤田菖畔氏は、まづ仮名の分類として、

女手……平がな
草書……草
行書
楷書……男子
万葉仮名(変体仮名)

と定義付けている。その上で、かな文字というのは、

これは男女の恋愛感情伝達様式等からも考えられ、煩雑な漢字では自分の思う事を自由に、又、美しい連綿様式で綴られる仮名が平安朝の人々の美的感覚に良く合い、繊細な情緒、あわれの精神を持った当時の貴族達の心をよく映し、満足させるものであったとい

う事から考えても当然であろう。

男手、草、女手と分れる頃にはかなは実的な面から離れて芸術的な面へと移っていった。そして単に要件を伝えるだけの文字ではなく、その人の技巧、趣味、教養、人柄を示すしるしのようなものとなり、色々の種類の文字を使い分け、自由に散らし書きをしたり、墨の濃淡を用い趣向を凝らし、更にそれを鑑賞するのを楽しみ、批評をしたりしたのである。¹²⁾

と述べている。これは、「煩雑な漢字では自分の思う事を自由に」伝えることができず、かな文字のほうが、「繊細な情緒、あわれの精神を持った当時の貴族達の心をよく映し、満足させるもの」だったからである。しかしながら、藤田氏が述べておられる「男手、草、女手と分れる頃にはかなは実的な面から離れて芸術的な面へと移っていった。」とするには、まだかな文字は、漢字のような公的な使われ方でなく、消息のよくな私的な文字として、長きにわたり使われていたのである。その後、かな文字が貴族社会において、手習いのお手本として、さらには賞翫されるようになっていったのではないだろうか。

また、『源氏物語』が書かれた、この時代の評価として、目崎徳衛氏は、道長も愛読した『源氏物語』の「総合」の巻には、光源氏が後見する藤壺の女御とライバルの女御が帝の前で絵巻を競う話があるが、その物語絵の詞書の筆者は片や道風、片や貫之ということになっている。つまり紫式部は貫之を道風と肩を並べる名手とみなしていたわけで、『源氏物語』はもとよりフィクションだけれども、この高い評価は架空のことではあるまい。この頃の定評だったのだらう。¹³⁾

と述べている。これは、「紫式部は貫之を道風と肩を並べる名手とみなしていた」のであり、「フィクションだけれども、この高い評価は架空のこと」ではなく、「この頃の定評だった」のである。

さらに、山本利達氏は、「今の世」について、梅枝の巻における、あの「かんなのみなむ今の世はいとときはなくなりたる」という源氏の言葉は、作者によって書かれた言葉ではあるが、行成の時代を待たずともなく、道風時代の仮名を見ることによってもいいえたとと思われる。当時残存していた古い仮名の資料を目にすることのできた作者なら、道風時代に至る仮名の書の歴史の認識の上になされたものと十分考えられるし、「今の世」は、道風時代を現代とする時代とみるのが、源氏物語の世界を素直に読む道ではないかと思う。¹⁴⁾

と述べている。これは、紫式部が、「当時残存していた古い仮名の資料を目にすることのできた」であろうから、「道風時代に至る仮名の書の歴史の認識の上になされたもの」として、「今の世」は「道風時代を現代とする時代」としている。

しかしながら、道風時代（八九四～九六六）の現存しているかな作品の「虚空菩薩念誦次第紙背仮名文書」（九六七）は、その時代において、最も新しい書風である。

これらのことについて、池田和臣氏は、かなの爛熟期は、源氏物語よりも五十年以上あとにやって来たのである。それゆえ、（和様の漢字は行成によって完成され極みに達したが、同じ時代のかなはまだ発展途上にあった、源氏物語の時

代のかなはまだ高野切の域まで達していない段階であった」とする
 のが、書道史の通念になっている。

紫式部にとって、自分の生きた時代でただ一つ誇れるもの、それはかなであった。が、紫式部はかなの本当の絶頂期を知らなかったことになる¹⁵⁾。

と述べている。これは、「かなの爛熟期は、源氏物語よりも五十年以上あとにやって来たのである。」というの、実際の書道史において、かなの絶頂期といわれる「高野切」や「西本願寺三十六人集」「元永本古今集」などがまだ書かれていない、「いまだ発展途上にあつた、源氏物語の時代のかなはまだ高野切の域まで達していない段階であつた」のである。それゆえ、紫式部にとって、誇れるかな文字ではあるが、「本当の絶頂期を知らなかった」のである。

七 おわりに

『源氏物語』の時代設定は、準拠に拠ると実際の執筆年より一〇〇年前(九〇五頃)であり、さらに梅枝巻は、執筆年より五〇、六〇年前(九四五〜九五五)といわれている。

その頃の書道史上から見ると、紫式部の生きていた源氏執筆年(一〇〇六〜一〇一一頃)は、まだかなの完成期まではいっていない。それは、『源氏物語』の時代設定(九〇五〜九五〇頃)と同じように、かなの過渡期の「草がな」の時代だったのではないだろうか。それは、本文からもわかるように、「仮名というもの書きませず」①や、③⑤⑥⑦⑨⑩のように「草がな」がよく使われ、⑩のように漢字をあまり使わ

ず、しかし、⑨のように草がなだけでなく、普通の字(漢字)も女手(平がな)も、さらに⑧のように葦手や歌絵も書かれるような時代であった。また、実際に現存されている「秋萩帖」の万葉仮名の草体で書かれた古雅な書風や、「虚空菩薩念誦次第背仮名消息」(九六七)の行頭に變化を加えた、すがすがしい筆致や、「北山抄紙背仮名消息」(九九七頃)のような流れのある連綿線の発達した、自由奔放な書きぶりに、この時代のかなの最も新しい書風をうかがわせるのである。しかしながら、文字の太細、墨の潤濁、料紙においては、まだまだ完成期と言われる「高野切」のような端正な滑らかさは、感じられないのである。さらに、變化に富んだ書風で、豪華絢爛な料紙で書かれた「西本願寺三十六人集」や「元永本古今集」のような、かなの絶頂期の作品までは到達していないのである。

これらのように、実際に変化していたかなの書風を目の当たりにしていた紫式部であるから、「仮名のみなん今の世はいと際なくなりたる。」の一文は、『源氏物語』の時代設定(九〇五)を踏まえた上で、執筆している今現在(一〇〇六〜一〇一一頃)に至るまで仮名が良くなっている、ということではないだろうか。

それは、「妙にかしきことは、外よりてこそ書き出づる人々ありけれど」(梅枝)や「まことの筋をこまやかに書き得たるは、うはべの筆消えて見ゆれど、いまひとたびとり並べて見れば、なほ実になんよりありける。」(帚木)のように、中国から入ってきた漢字から、日本で成立した独自のかなが時代とともに変化していき、まねていた漢字に比べ、より書き手の個性が表されるかながすばらしいということである。

このように、『源氏物語』の書道観とは、文字の形という表面上の美しさだけでなく、書き手の心のありようまでもが内包された表現美なのである。このことは、かなが手習いの手本にするだけでなく、書道史上でも明らかのように、より豪華絢爛な賞翫するものへと変化していった、そのゆえんでもあるのではないだろうか。

また、今後の課題として、『紫式部日記』や他の平安文学も取り上げていき、書道史上では作品とともに、その時代において、どのような筆・墨・紙が使われていたのかも、検証し考察を加えていきたい。

〔注〕

- (1) 小松茂美『展望日本書道史』（中央公論社 昭和六一）
- (2) 阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男校注・訳『新編日本古典文学全集12源氏物語』（小学館 一九九六年）
- (3) 駒井鶯静『源氏物語とかな書道』（雄山閣出版 一九八八）
- (4) 小松茂人「『源氏物語』の芸道論覚書―書道論について―」『聖和』11巻（一九七三・一一）
- (5) 上野辰義「絵画と書―その複合性と記録性―」『源氏物語研究集成』第11巻（風間書房 二〇〇三）
- (6) 春名好重編『古筆大辞典』（淡交社 昭和五四）
- (7) 酒井明編『墨スペシャル』第12号（芸術新聞社 一九九二）
- (8) 前掲『古筆大辞典』による。
- (9) 前掲『墨スペシャル』による。
- (10) 前掲『古筆大辞典』による。
- (11) 小松茂美監『日本名跡叢刊 平安 假名消息』（二玄社 一九八六）
- (12) 藤田莠畔「紫式部書道観―『源氏物語』におけるかな文字―」『金沢大学 語学・文学研究』第15号（一九八六・一）
- (13) 目崎徳衛「平仮名の創出と古今集勅撰」『書道研究 5月号』第4巻

- 5号（一九九〇・五）
- (14) 山本利達『源氏物語攷』（瑞書房 一九九五）
- (15) 池田和臣「源氏物語千年紀 かなと源氏物語」『墨新装刊2号』196号（芸術新聞社 二〇〇九・二）
- (16) 参考前掲『墨スペシャル』による。

（なんじょう かよ

文学研究科国文学専攻博士課程）

（指導：長尾 秀則 教授）

二〇一〇年九月二十八日受理

